

目的 配偶喪失についての研究は、老年期において一般的に重要性をもつ研究課題であると考えられる。子供の独立と定年退職の危機をのり越えて適応した夫婦も、老年期にはさらに、配偶者との死別という重大な危機に直面しなければならない。本研究では、配偶者との死別という予測すべき事態への準備についての意識と行動、配偶者の死によって生じた生活変化、情緒結合や子供との同別居意識への配偶喪失の影響などを検討した。

方法 福岡市と北九州市の軽費老人ホーム3カ所と北九州市と宗像市の老人クラブを通して、配偶者と死別している60歳以上の無配偶者を対象に調査を行った。調査時期は1987年12月である。回収した調査票のなかから記入もれが多いものを除き、配偶者と死別時の年齢が55歳以上で死別後の期間が20年未満で子供がいる者を選びだし、分析の対象とした。分析の対象となったサンプルの数は、男性174人と女性207人である。

結果 配偶者と死別後のことについて、夫婦で話し合ったことがなかったという者が半数近くいる。話し合ったといっても男性の4人に1人は、妻に先立たれた場合のことを想定してはいなかった。死別後の生活変化ではまず、老後不安や孤独感が強まっていることが挙げられる。とくに男性の孤独感が強い。さらに、男性の家事時間の増加に対し、女性では逆に家事時間が減少し友人との交際の増加が目立つ。配偶者と死別後は、信頼・理解・愛情といった情緒的統合欲求の相手として、子供は配偶者には及ばないまでも重要な役割をはたしている。しかし、子供との同別居意識への配偶喪失の影響は少なく、女性では4割、男性でも3割の者が死別後の現在でも一貫して別居を望んでいる。